

ネパール地震災害緊急報告会『ネパール地震災害調査報告-斜面災害を中心に-』を開催しました(2015/6/11)

テーマ：ネパール地震

場所：災害科学国際研究所多目的ホール

共催：日本地すべり学会、東北地理学会、東北大学災害科学国際研究所、宮城教育大学教育復興支援センター

2015年6月11日(木)、「ネパール地震災害緊急報告会『ネパール地震災害調査報告-斜面災害を中心に-』」を災害科学国際研究所多目的ホールにおいて開催し、研究所内外から65名の参加が得られました。冒頭、共催団体として奥村 誠 副所長/教授(人間・社会対応研究部門)より「災害科学国際研究所としても、ネパール地震への対応を国際協力機構と現在協議中です。災害前から長きにわたってネパールの実情を知る専門家から、現地の最新の状況を教えていただきたい」と挨拶が述べられました。続いて、山形大学 八木浩司教授より、日本地すべり学会2015年ネパール・ゴルカ地震緊急調査団の報告が行われました。八木教授は、5月8日に災害科学国際研究所が開催した「2015年ネパール中部地震への被災状況把握と支援に関する緊急シンポジウム」でも発表されています。緊急調査団には、弘前大学檜垣大助教授、群馬大学若井明彦教授も参加し、5月29日~6月2日の日程で、カトマンドゥ市内、シンドゥパルチョーク郡チョータラ(尾根の上の街)、ラムサング(スンコシ沿いの谷底に位置する街)、カトマンドゥ盆地バラジュ地区、パタン地区を訪問した後、ワスラ郡ランタン、シンドゥパルチョーク郡メラムチ川、インドゥワラティ川、ポテコシ・スンコシ川流域でヘリコプターによる上空からの被害調査を行っています。

八木教授の報告のまとめは、以下の諸点になります(当日配布資料より抜粋)。

- ・ 中山間地で見られた家屋やビルの倒壊は、地震動が増幅されやすい稜線上に立地する集落の特徴や、埋土上に建てられたことに起因すると考えられる。
- ・ 古い集落は、泥で積み上げたスレート・煉瓦造りであったことが被害を大きくした。
- ・ 低ヒマラヤから高ヒマラヤ移行部の狭窄部(急傾斜域)で斜面崩壊が多発している。
- ・ ほとんどの地形災害、遷急線付近で発生した表層崩壊である。しかし、起伏が大きな谷壁上部で発生したため、破壊力が大きかった。
- ・ 崩壊デブリは、一部で一時的な河道閉塞を起こしたが現在ではブリーチした。
- ・ 深層地すべりは少ないが、トリスリ川沿いに今後拡大の懸念される現象がある。
- ・ ランタンで発生した地変は、同時多発的斜面災害←すなわち岩屑雪崩、土石流、および雪氷災害によるものである。さらにそれらが引き起こした爆風により、被害が大きくなった。
- ・ カトマンドゥ盆地における長周期の動きが固有の災害を引き起こしている。
- ・ 山地斜面から崩れ落ちた岩屑のモンスーン期の二次移動としての土石流災害が懸念される。
- ・ 中山間地における学校施設の被災が深刻である。日本からのサポートを必要としている。

報告に続いて活発な意見交換が行われました。八木教授からは、「谷に暮らしてきた人々の安全な場所へのリロケーションが当面の課題となるであろう。チベット系の彼らは、災害耐性にも強く、これまでは少し崩れてもまた田畑をはぎあわせて同じ場所で暮らし続けてきた。しかし、ランタンでは全ての人と同じ場所に戻れるかについては、悲観的である。また、ヒンドゥ教カーストのあるネパールでは、避難キャンプでは違うカースト同士隣合わせで暮らすことも、食料を分け合うことも難しい。こうした事情を踏まえた上で、今後の復旧・復興を考えていかなければならない」と指摘がありました。

文責：桜井 愛子、佐藤 健(情報管理・社会連携部門)

(次頁へつづく)



ランタンの全容（提供：八木教授）



ポテコシの斜面（提供：八木教授）



奥村副所長による挨拶と会場の様子



ヘリ調査の報告を動画で説明する八木教授